

## ドイツ文学わき道散歩(6)

師走の日本列島に響く歌声。ベートーヴェン作曲の第九交響曲合唱付、所謂“第九”は年の瀬の風物詩となつて久しい。しかしこの楽曲の合唱テキストが、ゲーテと並び称される偉大な劇作家の手によるものであることをご存知だろうか。フリードリヒ・フォン・シラーの詩『歓喜に寄す』は、フランス革命の4年前、1785年に作られた。「さあ、ともにいだし合おうもろびとよ!」というフレーズが印象的なこの詩は、自由を、喜びを謳った美しい詩で、革命の気運高まるヨーロッパで広く長く受け入れられたことは言うまでもない。“第九”の初演はシラーが既に没したのちのことで、ベートーヴェンは実に30年もの歳月をかけてこの詩に曲をつけたのである。

まず大作家の詩ありき、と言えば思い出されるのは「わらべは見たり野なかのバラ」という歌詞で始まる『野ばら』ではなからうか。幾通りかの歌を思い浮かべるかも知れないが、ゲーテの詩にヴェルナーとシューベルトがそれぞれ異なった曲をつけたものがよく知られている。他にもジルヒャー作曲の歌曲『ローレライ』は後期ロマン派詩人のハインリヒ・ハイネの詩、シューマン作曲『月の夜』は同じく後期ロマン派のアイヒェンドルフの詩、と枚挙に暇ない。そしてドイツ語圏以外でも、ドイツ文学と音楽とは切り離すことができないと言えよう。ヴェルディ作曲の歌劇『群盗』『ドン・カルロ』や、序曲が有名なロッシーニの歌劇『ウィリアム・テル』もシラーの戯曲が元となっているのだ。

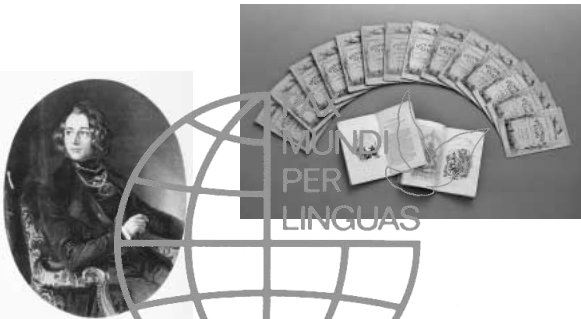
ところで、今回名を挙げたこれらの作家たちが活躍した時期は殆ど重なっている。この時代こそがドイツ文学の黄金期と呼ばれる時なのだが、それは別のお話、またの機会にお話しよう。

1999年度ドイツ語学科卒業生 小林 ゆかり

## 本学図書館のスペシャルコレクション(18)

### チャールズ・ディケンズ ~ Charles Dickens ~

チャールズ・ディケンズ(1812 - 1870)はイギリスのヴィクトリア時代の作家。このコレクションには、彼が分冊のかたちで出版していた『ピクウィック・ペーパーズ』などオリジナルの作品が多く含まれており、当時のイギリス社会を知る上で重要な資料となっている。なお、右下の画像は本学図書館に置かれた彼の大理石製の胸像である。



コレクション収録数 約1,210点